

④「尾瀬の野生動物」

—生物多様性の視点から見た尾瀬問題

下野武司・山本敏子（テーマリーダー）

大島克海・金子陽祐・星野充宏（尾瀬高校生徒）、大船武彦・小亀真知子（自然保護委員会）、鎌倉淑子・川上進（緑爽会）、河合義則（富山支部）、鬼頭良吉・中川美子（東海支部）、河野直子（関西支部）、酒井展弘（京都滋賀支部）、坂庭浩之（群馬県林業試験場）、白島達彦（越後支部）、武田一生（北海道支部）、西谷隆亘・西谷可江（東京多摩支部）、春山明子（群馬野生動物事務所）、日向祥剛（北九州支部）、松井孝夫（群馬県立中央中等教育学校）、横田陽子（群馬県衛生環境研究所）（敬称略、五十音順・所属別）

最初に全員が自己紹介をした後、テーマリーダーの方から、JAC自然保護全国集会においてシカ問題が大きく取り上げられてきた経緯を踏まえて、生物多様性の視点から見た時、シカの増加は尾瀬の生態系にどのような影響を及ぼすのか、簡単に話題提供をした。

自由討議では、各支部・各地からの現状

報告、尾瀬で野生動物調査に携わっている春山さんからのシカの生態や保護管理の方針等の話、尾瀬高校生徒の皆さんからの活動紹介等、活発な意見交換が行われた。全体会では、河合さんに発表をさせていただいた。以下、意見をいくつかの論点にまとめ報告したい。

①各地のシカ問題の深刻な現状：京都支部による北山のヤマシヤクヤク保護を目的とした観察調査を通して、実はその生育がシカの食害の進行によるもので、現在、琵琶湖周辺の山や鈴鹿山系にも山全体の植生の単純化が見られることが報告された。シカは斜面を垂直に登下降するために登山道、土壌が崩壊し、川が濁ることによってアユ、ヤマメが少なくなる、昆虫が減り、キジも見られなくなる等、生物多様性が破壊されているという。京都ではシカの被害が甚大で、農家や耕作地が柵で囲われてその中で人間が暮らす有様であるとのこと。一方、北海道支部からは、管理頭数十万頭が限度のところから六十四万頭ものエゾシカが生息して田んぼの中を無造作に走り、もはや調査の段階を越えて自衛隊が駆除協力のために出動している現状が報告された。また、北

九州ではイノシシやサル被害が著しく、富山ではクマの問題が深刻とのことだった。

②尾瀬のシカ問題の歴史：尾瀬のシカは「日光・利根地域個体群」の最前線にあるものだが、尾瀬に昔からシカがいたかという点、江戸時代のシカの分布は関東山地あたりまでだった。それが開発によって生息地が追い込まれ、高い山にまで分布するようになった。尾瀬でシカの食害が確認されたのは一九九五年であり、シカの捕獲数等から考えて尾瀬ヶ原では今日でも減っているとは言えない。

③適応力のあるシカの生態：野生動物は美味しいものがあると覚えると、毎年、代々、その場所へ行く。シカは学習能力が高く、美味しいミツガシワやニッコウキスゲから食べ始めるが、それがなくなるとミズバショウからスゲ類へ、さらには毒のあるクリンソウやマルバダケブキまでも食べるようになる。同じ個体群の日光のシカは、今ではイケマなど少数の有害植物以外は何でも食べている。

④県境を越え、多方面に及ぶシカ問題：シカ問題の対策は、国立公園と農林業の盛んな地域とは分けて考えなければ



ニホンカモシカ

ならないが、いずれにしても都府県や市町村の境界を越えて分布するシカは適応力があり、場所毎にその生活様式はかなり異なるので、各個体群の特色を把握して、それに対応した対策をとることが重要である。奈良公園にいるシカは問題ないのだろうか、という疑問も出された。

⑤ **人間活動の結果としての野生動物問題**：実は野生動物の問題は、人間が自然に過度に関与・干渉したことが元になっ

て起こっている。特に大型哺乳類の場合が深刻である。

⑥ **野生動物問題の解決のために**：生物多様性をどう守るのかという価値観の下でこの問題を考えていく必要があるのではない。

- ・尾瀬では本来シカがいなかったため、これを目標に定めてシカを排除するという考え方で保護管理を進めている。また、今年になって漸く尾瀬でも防護柵の設置を始めた。

- ・尾瀬ヶ原では、高架の木道沿いに、その下は水がたまりやすいこともあって（シカの好物の）ミツガシワが生育し、小さい個体だが数は維持されていることがわかってきた。

- ・フィールドワーカーの養成が大きな課題であり、尾瀬高校の皆さんに期待したい。そのためには、フィールドワーカーが生活できる体制を整えていかなければならない。

- ・自治体毎に猟師がシカ一頭撃った時の報奨金が異なり、地域によっては弾代にもならない。自治体毎に異なる報奨金を一律に魅力あるものとし狩猟を促す必要がある。

- ・フィールドワーカー養成やシカの捕獲報奨金等のために基金を作るというやり方もある。

- ・また、捕獲したシカ肉が食卓に上るよう
- に食肉生産・流通システムの構築が急がれる。

⑦ **「自然保護」ということの難しさ**：最後に、参加者の多くから自然保護ということとは本当に難しいという感想が寄せられた。自然保護という時の「自然」を人間と切り離されたものとして考えて、何もせずにいるのが一番よいとするのか否か。その難しさは、江戸時代にはなかった「自然保護」という用語が、ヨーロッパから入ってきた微妙に意味の異なる五つの言葉の翻訳語として定着した歴史とも深く関わっているとのことだった。

全体討議では、シカの食害から高山植物を守るために防護柵を設けることは是非について疑問点が出された。春山さんによれば、それは捕獲と防除にどれほどの投資が可能か、維持管理も含めた将来の見通しの問題に関わっているという。最後の小泉先生のコメント（人間がオオカミの代わりになって適正な管理をしなければならぬ）が分科会参加者の心に響いた。（山本敏子）